

# ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究 4

～『ウラマー・イエ・イスラーム』の写本蒐集と校訂翻訳～

青 木 健

\*本論文は、青木 2010 年, 2011 年 a, 2011 年 b の補論である。

## 目次

補論 1. イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex の UI-2  
改作

補論 1-1. イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex

補論 1-1-1. 『ウラマー・イエ・イスラーム』(UI-2) の長文改作の収録

補論 1-1-2. コーデックスの内容

補論 1-1-3. 錯簡と破損

補論 1-1-4. コロフォンと書写年代

補論 1-1-5. 蔵書印と来歴

補論 1-2. 『ダーダール・ダードドフトの書』の先行研究と写本状況

補論 1-2-1. 『モーバダーン・モーベド・ダーダール・ダードドフトの書』

とは

補論 1-2-2. ミュンヘン写本・大英図書館写本・ナヴサーリー写本

補論 1-2-3. 写本の伝承経路

補論 1-2-4. 『ダーダール・ダードドフトの書』の 2 つの意義

補論 1-3. 第 1 の意義：『ダーダール・ダードドフトの書』の分析

補論 1-3-1. 構成

補論 1-3-2. 内容

補論 1-3-3. 改作部分のペルシア語原文と日本語訳

補論 1-3-4. 改作の特徴

補論 1-4. 第2の意義：1780年モッラー・カーウス将来コーデックスの重要性

補論 1-4-1. モッラー・カーウス将来コーデックスの行方

補論 1-4-2. ゴロアスター教ペルシア語写本コーデックスの3系統

補論 2. サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の再評価

補論 2-1. カディーミー派が将来したケルマーンでの書写版

補論 2-1-1. 再評価の必要性と再調査

補論 2-1-2. コロフォンに見る1677～91年編集版との関係

補論 2-1-3. コロフォンに見るカディーミー派との関係

補論 2-2. シャーハンシャーヒー派が書写したカディーミー派将来本

補論 2-2-1. 書写生の依頼主と蔵書印に見るシャーハンシャーヒー派との関係

補論 2-2-2. シャーハンシャーヒー派が「1780年モッラー・カーウス将来コーデックス」を再蒐集

補論 2-3. サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の意義

図表 39：『ダーダール・ダードドフトの書』の写本状況

図表 40：ゴロアスター教ペルシア語写本コーデックスの3系統の分岐

図表 41：サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の推定伝承経路

**補論 1. イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex  
の UI-2 改作**

**補論 1-1. イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex**

**補論 1-1-1. 『ウラマー・イエ・イスラーム』(UI-2) の長文改作の収録：**本論擧筆後、2009～2010 年度の調査で蒐集したゾロアスター教ペルシア語写本コーデックスの中に、新たに『ウラマー・イエ・イスラーム』(UI-2) を改作した長文が見出された。これは、表題上は『ウラマー・イエ・イスラーム』と明記されず、別題の文献の中に組み込まれる形で引用されていた為、本論執筆中には気が付かなかったものである。

検討の結果、この長文改作を引用している文献は、イランに於ける新出コーデックスだと判明した。また、その書写状況は、ゾロアスター教ペルシア語写本コーデックスの伝承過程に関して、意義あるデータを提供してくれると判断できた。そこで、この場をお借りして、このコーデックスに関する補論を報告したい。

**補論 1-1-2. コーデックスの内容：**そのコーデックスとは、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex である。これは、現在の保存状態では以下の 6 リサーラで構成されている。

1. 無題 (巻首を欠く) : fol. 1r～fol. 6r
2. *Dāstān-e Khwān Nāme* (『夢の物語の書』) : fol. 6v～fol. 8r
3. 無題 (incipit は「正義王アヌーシルヴァーンの時代には…」) : fol. 8r～fol. 50r
4. *Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht va Keyfīyat-e ān* (『モーバダーン・モーバド・ダーダール・ダードドフトとその状況の書』) : fol. 50v～fol. 88r
5. *Sougand Nāme* (『誓約の書』) : fol. 88r～fol. 90v

6. *Zand Bahman Yasht va Jāmāsbī* (『ザンド・バフマン・ヤシュトとジャーマスビー』) : fol. 90v~fol. 96v (巻尾を欠く)

本コーデックスは、今までに研究対象として採り上げられた形跡がない。これもまた、イランで見付かった未知のコーデックスの1つである。6つのリサーラのうち、第5, 6リサーラは、既存の『ゾロアスター教ペルシア語教示書』で確認される題名と一致する (Dhabhar 1932, pp. 39-51; 457-497)。しかし、第2リサーラは、題名上は新出の資料である。第1, 3リサーラは題名を欠くので、今のところ何の評価もできない。そして、第4リサーラが、UI-2長文改作を含んでいる論考に当たる。

**補論 1-1-3. 錯簡と破損**：本コーデックスの扱いを難しくしている要因が幾つかある。第1に、イラン・イスラーム共和国議会図書館が製本する際に、各フォリオの順番を十分に考慮せずにバインドしたらしく、しばしば錯簡が見られる点である。例えば、ここで取り上げる第4リサーラは、単純に表題の区切りからすれば、fol. 50v~fol. 88rを占めているように見える。だが、この順番で読み進めると話が途中で途切れてしまい、意味が通らない。筆者が通読した限りでは、第4リサーラの範囲はfol. 50v~fol. 64v, fol. 81r~88rに絞られ、途中の16フォリオ分は別のリサーラ(それが何であるか、筆者には分からなかった)からの混入である。因みに、議会図書館発行の写本カタログでは、第4リサーラの範囲はfol. 66v~fol. 88rと記載されているが、この間違いも混乱に拍車をかけている (Hā'erī 1305-1377AH, pp. 271-272)。

第2に、全体として破損が激しい点である。最初の33フォリオには何らかの形のダメージが見受けられ、特に第3, 7, 12, 13フォリオは全体の1/3が、第17フォリオに至っては上半分が失われている。また、第1フォリオは話が途中から始まるので、明らかに巻首を欠く。更に、最末尾の第96フォリオの文末も途中で切れ、第6リサーラが6フォリオしかない。現存する『ザンド・

バフマン・ヤシュトとジャーマースピー』の分量から推測すれば (Dhabhar 1932, pp. 481-493), 巻尾の相当部分が散逸していることは確実である。これらについては復元を試みたものの、破損していないファリオの中には巻首や巻尾に該当するページは見出せなかった。

**補論 1-1-4. コロフォンと書写年代：**巻首と巻尾を欠くコーデックスである為、全体をカバーするコロフォンが失われている。しかし、それに代わるものとして、各リサーラの末尾に以下の3つのコロフォンが記されている。

- ・第1のコロフォン (fol. 4v)：バフラーム・メフラバーン・バフラーム・ゴシュタースブがシャフレーヴァル日に書いた。(年月を欠く)
- ・第2のコロフォン (fol. 8r)：バフラーム・メフラバーン・バフラーム・ゴシュタースブが1000と14年バフマン月オフルマズド日に書いた。
- ・第3のコロフォン (fol. 50r)：バフラーム・メフラバーン・バフラーム・ゴシュタースブがジャラーリー暦1000と14年ホルダード月シャフレーヴァル日 (=西暦1635年) に書いた。

いずれも「バフラーム・メフラバーン・バフラーム・ゴシュタースブ」という人物が書写しているので、コーデックス全体が彼の手になる可能性が高い。但し、彼がどのような人物なのかは、インド側の写本のコロフォンには登場しない為、全く不明である。今後のイラン側の写本のコロフォンの情報に期待したい。

また、第3のコロフォンは、正確には *andar rüz-e Shahrīvar mäh-e khordād mäh-e Qadīm 1000 va 14 Jalālī, man dīnbande Bahrām-e Marzbān...* と書かれているのだが、ゾロアスター教ペルシア語写本ではこのような記年法は初出である為、解釈は難しい。17世紀のイスラーム世界で「ジャラーリー暦」と言えば、一般的には2つの可能性が考えられる。第1に、サファヴィー王朝の支配領域では、モンゴル時代以降に頻用された「中国・トルコ暦」をそのまま国内向け

の文書行政に用い、一部ではその暦法を「ジャラーリー暦」と異称した（後藤2008）。第2に、ムガル帝国の支配領域では、セルジューク王朝時代の君主ジャラルッディーン・マリク・シャーに因む太陽暦「ジャラーリー暦」をそのまま使用していた。従って、「バフラーム・メフラバーン・バフラーム・ゴシュターズプ」がサファヴィー王朝の領域にいたのか、それともムガル帝国の領域にいたのかによって、彼の「ジャラーリー暦」がどちらを指すのか変わってくる。或いは Qadim の語が冠される以上、ゾロアスター教徒に特有の現象として、イラン風のヤズデギルド太陽暦（インド風のヤズデギルド暦に比べて1ヶ月早い）をこの名称で呼んだ可能性も捨て難い。現段階では、このジャラーリー暦の解釈は保留である。以上の検討については、白羊朝時代史が御専門の小野浩氏（京都橋大学教授）と、サファヴィー朝時代史が御専門の大塚修氏（東京大学大学院人文社会系研究科東洋史専攻博士課程）の御教示によるところが大きい。記してお礼を申し上げたい。

**補論 1-1-5. 蔵書印と来歴：**このコーデックスには、fol. 1r, fol. 7r, fol. 37r, fol. 96v の合計4ヶ所に、「1302年議会図書館」の蔵書印がある。暦法が明記されていないが、ヒジュラ暦だとすれば西暦1884/5年になってしまい、イラン・イスラーム議会図書館そのものが存在していない。従って、イラン太陽暦1302年＝西暦1944年に収蔵された写本と考えられる。

それ以前の由来は不明である。イラン・イスラーム議会図書館所蔵 Majles 87947 Codex にはグジャラート数字でページ番号が振られていたので、一旦インド西海岸に渡ったコーデックスがイランへ逆輸入されたと確認できた（青木2009年, pp. 141(140)-140(141)）。しかし、このコーデックスにはそのようなインド的痕跡がない。この点から推測すれば、本コーデックスは1635年にサファヴィー王朝の支配領域で書写され、そのままイラン国内で保存されて、1944年に至った可能性が最も大きいと考えられる。

**補論 1-2. 『ダーダール・ダードドフトの書』の先行研究と写本状況**

**補論 1-2-1. 『モーバダーン・モーベド・ダーダール・ダードドフトの書』**

とは：本稿で取り上げる文献は、このコーデックスの第 4 リサーラ『モーバダーン・モーベド・ダーダール・ダードドフトの書』（以下、『ダーダール・ダードドフトの書』と略）である。本書は 3 部から成り、その第 3 部（fol. 63, l. 16-fol. 64v, l. 17, fol. 81r, l. 1- fol. 87v, l. 16）が、UI-2 の第 1～44 節を改変した個所に当たる。

この『ダーダール・ダードドフトの書』は、ゾロアスター教ペルシア語写本であるにも拘わらず、本論第 3 章で述べた『ゾロアスター教ペルシア語教示書』には含まれていない。つまり、1691 年まではインドで知られていなかった文献である。而して、1866 年以降に、以下の 3 点の写本が相次いで確認されている。

**補論 1-2-2. ミュンヘン写本・大英図書館写本・ナヴサーリー写本：**最初に発見された写本は、1866 年にマルティン・ハウク（1876 年没）がインドから持ち帰り、ミュンヘン州立図書館に寄贈した MH コーデックス No. 7（現在は M コーデックス No. 7 と改称）に収録されている。このコーデックスは 1809 年 1 月 27 日に書写が完了したもので、パフラヴィー語とペルシア語のリサーラ合計 13 点を収録する。その第 13 番目、fol. 188～fol. 213 に、『ダーダール・ビン・ダードドフトの書』として収められているリサーラが、本書と一致した。ハウクは本書を、「パフラヴィー語からペルシア語訳されたものと思われる」と高く評価している（Haug 1884, p. 113）。但し、ハウクは、本書の第 3 部が UI-2 の長文改作に当たることには気付いていない。

次に、エドワード・ウェスト（1905 年没）が、来歴不明の大英図書館所蔵 Or. 8994 コーデックスの fol. 104～fol. 139 に同じ文献が収録されていることを突き止めた。しかし、ウェストの推測によれば書写年代は MH7 と同時期であ

り（但し、その具体的根拠は示されていない）、保存状態は劣悪で誤写が多いので、MH7の情報を更新するには至らなかった。また、彼の評価によれば、本書は「疑いもなくフィクションである」とされる（West 1896-1904, pp. 123-124）。ウェストも、本書第3部がUI-2の長文改作に当たることには気付いていない。

それから100年以上、本書は研究対象にならなかった。しかし、2002年になって、筆者がメヘルジー・ラーナー図書館（インド共和国グジャラート州ナヴサーリー）で、F52 Codexの第2リサーラに属する『アーラーステ』を取り上げて報告した（青木 2003年, p. 2; Dhabhar 1923a, p. 31）。筆者は当時、これをアーザル・カイヴァーン学派の文献と捉えていたものの、2011年現在の知見からすれば、『ダーダール・ダードドフトの書』の別題と理解するのが正しいと判明した。ここに訂正したい。

ミュンヘン写本と大英図書館写本には個別リサーラのコロフォンがないが、ナヴサーリー写本にはある。それによると、「モッラー・カーウース・ルスタムが、ルスタム・グシュタースプ・アルダシールに命じて、ヤズデギルド暦1155年（＝西暦1785年）に完成した写本から、ダストゥール・エーラチジーがヤズデギルド暦1247年（＝西暦1877年）に書写した」とある。このうち「モッラー・カーウース・ルスタム」とは、カディーミー派の指導者、モッラー・カーウース・ルスタム・ジャラル・バルーチー（1733～1802年）に該当すると考えられる。彼は1768～80年にイランに長期滞在して写本を蒐集しており、この原本は、1780年の帰国の際にイランからインドへ将来したのだと推測するのが妥当であろう。

また、「ダストゥール・エーラチジー」とは、モッラー・カーウースの息子が開いたモッラー・フェーローズ図書館（ボンベイ）に勤務し、その間に75点のペルシア語コーデックスを書写したことで有名な司書、ダストゥール・エーラチジー・ソーラーブジー・メヘルジー・ラーナー（1826～1900年）を

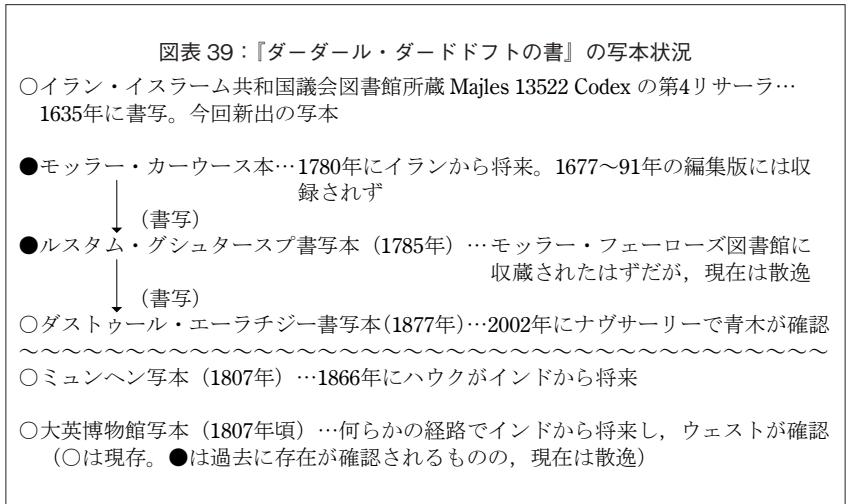


指すと考えられる。彼の書写本は全てメヘルジー・ラーナー図書館に寄贈されたと伝えられているので、この推定に間違いはないだろう。

**補論 1-2-3. 写本の伝承経路：**以上の推定が正しければ、嘗て存在した『ダーダール・ダードドフトの書』の写本は6点あるが、そのうち2点が失われ、現存写本は4点に減少している。それらの相互関係について、図表 39 に纏めてみよう。

**補論 1-2-4. 『ダーダール・ダードドフトの書』の2つの意義：**以上から、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex に『ダーダール・ダードドフトの書』が収録されていたことの意義は、以下の2つに纏められる。

第1に、『ダーダール・ダードドフトの書』の現存写本を150年近く遡る最古の写本を収録していた点である。これは、『ダーダール・ダードドフトの書』研究の上で重要性を持つ。もちろん、書写年代の点からして、本書に引用され



ている UI-2 の長文改作を『ウラマー・イエ・イスラーム』研究の上で新たに問題とするには当たらないが、UI-2 がどう改作されて二元論的なゾロアスター教徒の写本書写伝統の中に組み込まれたかを示す資料ではある。

第2に、ゾロアスター教ペルシア語写本の書写伝統全体に関わる指標となる点である。重要なのは、『ダーダール・ダードドフトの書』がイランから将来された後、直ぐにボンベイその他の西海岸のパールシー図書館に収蔵されず、一旦、ハイデラバード・デカンへ持ち去られた点にある。

この経緯を順を追って説明すると、インドのゾロアスター教徒は1746年に、暦法の相違を根拠として、全体の9割を占めるシャーハンシャーヒー派と1割に満たないカディーミー派に分裂した。上述のように、後者の指導者モッラー・カーウースは、1767～80年にイランに渡ってエスファハーンとシーラーズに長期滞在し、多数のゾロアスター教ペルシア語写本を蒐集してインドに持ち帰った。しかし、彼が新たに将来した写本は、1677～91年に編集されたコーデックスには収録されていないものばかりだった。そこで、シャーハンシャーヒー派からはカディーミー派による偽作だと批判され、「1780年モッラー・カーウース将来コーデックス」はゾロアスター教ペルシア語写本としては認められなかった。彼はこの為にボンベイに居辛くなったのか、1790年代にはハイデラバード・デカンへと居を移している。

だが、今回、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex に『ダーダール・ダードドフトの書』が収録されており、それがモッラー・カーウース将来本の1つから書写されたダストゥール・エーラチジー写本と一致することが判明した。1635年に書写されたコーデックスに収められた文献を、モッラー・カーウースが1767～80年に偽作できた可能性はない。即ち、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex の出現によって、「1780年モッラー・カーウース将来コーデックス」を偽作とするシャーハンシャーヒー派の主張には文献学的な正当性がないと判明したのである。

寧ろ、1780 年段階で不備があったのは、1677～91 年にインドで編集されたコーデックスの方であった。この状況から考えれば、その当時のイランには、インドでの編集版に収録されなかった独自のゾロアスター教ペルシア語文献が存在していた可能性が極めて高い。これは、モッラー・カーウース個人の名誉回復に留まらず、ゾロアスター教ペルシア語写本の書写伝統という視野で見れば、一括して偽作と見做されていた「1780 年モッラー・カーウース将来コーデックス」の認知を要請する事態である。

### 補論 1-3. 第 1 の意義：『ダーダール・ダードドフトの書』の分析

補論 1-3-1. 構成：先ず、第 1 の意義に即して、『ダーダール・ダードドフトの書』とそこに引用された『ウラマー・イエ・イスラーム』（UI-2）を分析しよう。本書はそれ自体としても今まで詳しく紹介されたことがないので、引用の分析に入る前に、『ダーダール・ダードドフトの書』全体の梗概を示したい。以下の章分け、節分けは筆者による。

『モーバダーン・モーバド・ダーダール・ダードドフトとその状況の物語』の始まり

主の名に於いて。慈悲深き創造者たる神の名に於いて。

### 第 1 章：ダーダール・ダードドフトとイランの知的伝統 (fol. 50v, l. 3-fol. 51r. l. 14)

- 1) マーニーのペルシア語とパフラヴィー語の書物には、彼を正統と呼ぶ 1 冊の書がある。ダーダール・ダードドフト<sup>cdxciii</sup>は、シャーハーンシャー・

cdxciii 直訳すれば「正義者・正義の娘の息子」となるが、このような人名はパフラヴィー語文献では確認されない。

シャープール<sup>cdxciv</sup>の時代にモーベダーン・モーベドを務めていた。このダーダール・ダードドフトは、人々が彼を正しいと呼ぶような光輪の持ち主である。(そう呼ばれる)理由は、あの(書物)をペルシア語で解説した(からな)のである。

- 2) 師ジャリール・アブー・マアシャル・ジーシュハーイーン・メフラバーン<sup>cdxcv</sup>はそれ(=マーニーの書物の翻訳)を望んだ。それと言うのも、この書物はディーンの言葉、つまりダリー語で伝承しており、誰もが自分で読みたいと思ったのである。モーベダーン・モーベド・アブー・ナスル・ブン・ソルーシュヤール・ブン・アーザルハッラード<sup>cdxcvi</sup>は、アードゥルバード・マーラスファンダーンの子孫で、つまりダーダール・ダードドフトの子孫なのだが、それを翻訳した。
- 3) シャープール・シャー・アルダシール・バーバガーン皇帝の時代に、ビザンティンの大王アブーリーヌシュ<sup>cdxcvii</sup>・カエサルに使者を派遣し、ビザンティンの医師たちやソクラテスやアリストテレスのような賢者た

---

cdxciv 後に「アルダシール・バーバガーンの息子」とあるので、シャープール1世(在位240~272年)に比定される。

cdxcv 実在が確認されない人物。イスラーム世界で「アブー・マアシャル」と言えば、一般には占星術師アブー・マアシャル・バルヒー(886年没)を指す。

cdxcvi 実在が確認されない人物。イスラーム世界で「アブー・ナスル」と言えば、一般には「ギリシア・イスラーム哲学の第2の師」アブー・ナスル・ファーラービー(950年没)を指す。

cdxcvii 発音から類推して、該当するローマ皇帝はアウレリアヌス帝(Aurelianus, 在位214~275年)と思われる。また、語頭の **ابو** を **يو** の書き損じと見れば、ユリーアーシュと音写して、ユリアヌス帝(Julianus, 在位331~363年)も候補に挙がる。前者だとしたら、シャープール1世と時代も合致する。この部分は、三津間康幸氏(東京大学大学院総合文化研究科学術研究員)の御教示による。記して感謝したい。

ちに質問を發した。カエサルはこれに應じて、ヒヤーンヌーシュ<sup>cdxcviii</sup> その他の醫師や医学書をシャープールに送った。

- 4) これに対して、ダーダール・ダードドフトは、「それらはもともとペルシアのエスタフルの賢者たちや王たちの知識だったのだが、ギリシアのアレクサンダーが持ち去ったのである。そして、我々の言葉をギリシア語にしたのである」と言った。

**第2章：ダーダール・ダードドフトとギリシアの醫師たち (fol. 51r, l. 14-fol. 63r, l. 16)**

- 5) 4元素説に基づく生命観、及び死後の靈魂の上昇などに関するギリシアの醫師たちの質問と、それに対するダーダール・ダードドフトの回答 (fol. 62r, l.9 まで)
- 6) ダーダール・ダードドフトはこう述べ、「これらの答えは自分自身の叡智と至高なる神の『クルアーン』のものである。それはペルシア語では『アヴェスターとザンド』と呼ばれ、神からザラートシュト・スフィタマーンに届き、ザラートシュトからグシュタースブ・シャーに告げられ、グシュタースブ・シャーからイーラーン・シャフルの人々に宣教されたものである。その後、ギリシアのアレクサンダーがエスタフルから奪い、ギリシア語に訳したのである」と説明した。(fol. 62v, l.5 まで)
- 7) 悪魔の起源に関するダーダール・ダードドフトの質問と、ギリシアの醫師たちの回答 (fol. 63r, l.9 まで)
- 8) ここにおいて、シャーハーンシャー・シャープールは、アレクサンダーがエスタフルから略奪してギリシア語訳した書物を取り戻し、ダーダ

---

cdxcviii 当時のビザンティンの醫師に擬した人物と思われるが、管見の及ぶ限り該当者はない。

ル・ダードドフトに翻訳するように命じた。

**第3章：ダーダール・ダードドフトとイスラームのウラマー (fol. 63, 1. 16-fol. 64v, l. 17, fol. 81r, l. 1- fol. 88, l. 7)**

9) 『ウラマー・イエ・イスラーム』UI-2の第1～44節を改変した、ダーダール・ダードドフトとイスラームのウラマーとの問答 (fol. 87v, l. 16 まで)

10) 創造と生命についてのまとめ

---

**補論 1-3-2.** 内容：以上のように、本書の内容は3部に分かれ、①イランの知的伝統、②ギリシアの医師たちとの医学討論、③イスラームのウラマーとの教義討論から成る。以下では、それぞれの内容を概観しよう。

①イランの知的伝統：第1章では、古代イランの叡智がアレクサンダー大王によって持ち去られ、ギリシア語に翻訳されたという伝承が述べられる。これは『デーンカルド』第4巻 (Zaehner 1955, pp. 7-9; 31-32), 『イラン版ブンダヒシュン』 (Bailey 1943, p. 153) などと一致するので、本書の著者はそれらを参考にしたに過ぎない。だが、その叡智を奪還するとされるダーダール・ダードドフトは、パフラヴィー語文献に典拠を見出せない人物である。

また、マーニー教の教祖マーニーが、彼の医学的知識の源泉となった書物の作者として登場している。筆者の知る限りでは、このようなマーニーに対する肯定的評価は、ゾロアスター教文献の中には見出せない。しかし、全編を通してマーニーへの言及があるのは冒頭のみで、これだけの記述から「ゾロアスター教におけるマーニー観の変化」を追究する訳にはいかない。但し、文章がこれだけで切れているのは不自然だから、書写途中で削除された可能性を否認せず、今後の新出写本に期待したい。

続いて、ゾロアスター教の賢者3名、ローマ皇帝1名、ローマの医師1名が

語られる。しかし、ゾロアスター教文献で確認されるのはアードゥルバード・マラスファンダーンだけで、他は見出せない。「ローマの大王アブーリーヌ・シュ」は、深読みすればローマ皇帝アウレリアヌスと同定できるかも知れないが、先行するパフラヴィー語文献に登場しない以上、発音が偶然似ていただけと考える方が自然である。

この虚構の状況設定に内容を盛る為に、『ダーダール・ダードフトの書』の著者は2つの討論を準備する。1つはギリシア医学に関して、もう1つはゾロアスター教の教義に関してである。内容の伴わないパフラヴィー語文献の伝承に、実質を与えようとしたのだと理解できる。そして、その為にゾロアスター教ペルシア語文献の中から、UI-2を改作して用いていることも判明した。

②ギリシアの医師たちとの医学討論：地水火風の4元素をベースにそれぞれの気質に即して生命現象を解説する点で、イスラーム医学に即した解説である。

③のイスラームのウラマーとの討論に出典があるところから見て、この部分にも何らかのペルシア語文献の下敷きがあったと思われるが、今回は特定に至らなかった。

③イスラームのウラマーとの教義討論：続く第3章では、『ウラマー・イエ・イスラーム』のUI-2版の第1～44節を、ダーダール・ダードフトが語った内容として引用している。

補論 1-3-3. 改作部分のペルシア語原文と日本語訳：以下では、UI-2改作の全文を示すには及ばない。特徴的な改作が行われている第8～13節に限って、原文を示そう。節分けは本論第7章のUI-2校訂に準じ、改作部分は下線部\_\_\_\_で示した。

---

8) در دین زراشت چنين پيدا ست كه چندان زمان دكر همه آفريده است.  
آفريدگار زمان است زمان را كناره پديد نيست و بالا بديد نيست و بن پديد

- ۱۰۷۷۰ همیشه بوده است و هر که خردی دارد نکوید که زمان از کجا آمد. با این همه بزرگوارى که بود کسی نبود که ویرا آفریدگار خواندی. چرا؟ زیرا که هنوز آفرینش نکرده بود.
- (9) پس آتش را و آب را بیافرید. چون بهم رسانید س ۶ س ۶ موجود آمد. و زمان هم آفریدگار بود و هم خداوند سوي آفرینش که کرده بود.
- (10) پس هورمزد روشن و پاک و خوش بوي و نیکوکردار بود و بر همه نیکوئیها توانا بود. پس چون هورمزد بیش تر نکرید نود و شش ۹۰ فرسنگ آهرمن دید سیاه و کنده و پلید و بدکردار. پس دادار اورمزد را شکفت آمد که خصم سهمگین بود.
- (11) و اورمزد چون آن خصم را دید اندیشید که مرا این خصم از میان بر باید گرفت و اندیشه کرد که بچند وجه قرار باندیشید.
- (12) و آغاز آفرینش کرد و س ۶ س ۶ هر چه کرد بیاری زمان نتواند کرد پس هر نیکی که اورمزد را بایست بداده بود. و زمان و درنگ خدای <sup>cdxcix</sup> پیدای کرد و بر اندازه دوازده ۹۰ س ۶ باشد. و سپهر و مینو و نقاش در وي پیوسته کرد.
- (13) و این دوازده برج که بر سپهر بسته است هر يك را هزار سال تربیت کنند و بر اندازه ج ۹۰ ووسدگار روحانی ساخته حمل و ثور و جوزا تربیت کننده بودند هر برجی مدت ۹۰ ووسد

---

次に、この部分を日本語訳してみよう。

---

(8) ザルトシュトの教えにはこう明らかにされている。幾らかの他の時間は、全て創造されたものである。創造者とは時間である。時間は無限であり、始原も終焉も無い。常にあったし、常にあるであろう。叡智を持つ者は誰であれ時

---

cdxcix この و は、他の写本には見られない。

d 他の写本では、ここに اورمزد が入る。



間の由来を語らない。だが、これら全ての嘗てあった偉大さにもかかわらず、彼を創造者と呼ぶものはいない。何故か？ それは、未だにそれが創造していないからである。

(9) それ（時間）は、火と水を創造した。（それらを）混ぜたらオフルマズドが出現した。そして時間は、彼が行った創造の故に創造者となり、また創造者となった。

(10) オフルマズドは光輝き、純粹で、甘く香り、善を成すもので、全ての善なるものに力を及ぼした。彼が下を見ると、96,000 ファルサングの彼方にアフレマンを発見した。それは、暗黒で、汚らしく、悪臭を放ち、悪をなす者だった。オフルマズドは、恐るべき敵の出現に驚愕した。

(11) オフルマズドは、あの敵を見て、『私はこの敵を真ん中から除去しなくてはならない。』と考えた。また、彼は、どれだけの武器の装備で全て考えて考えた。

(12) それから、彼は（創造を）始めた。オフルマズドは、何であれ時間の援護によって出来なかった。オフルマズドにとって必要な全ての善なるものを創造した。そして、時間と遅れた主が現れた。それは、12,000 年間の長さだった。その中に、天圏と画家と精神的存在を組み入れた。

(13) 天圏と結合した 12 宮は、各一つに 1,000 年が割り当てられた。（最初の）3,000 年間に精神的創造がなされ、白羊宮、金牛宮、双子宮が各 1,000 年に割り当てられた。

---

**補論 1-3-5. 改作の特徴：**以上、代表的な部分の原文と日本語訳を示した。本書の著者は、「時間以外は創造された」を「幾らかの他の時間は創造された」に、また「オフルマズドは時間の援護によって創造できた」を「出来なかった」に改めるなど、時間の役割を縮小している。これは、8～11 世紀に教義が二元論に確定して久しい 17 世紀の書写としては当然の対応である。しかし、「創造

者とは時間である」などの文章を削除していないので、必ずしも UI-2 がズルヴァーン主義的著作だとの認識があったとは思えない。

その結果として、本書にはズルヴァーン主義的要素が残り、全体として趣旨の通らない文意となった。ウェストが大英図書館写本を「保存状態が悪く、誤写が多い」と評価していたのは、写本に問題があったのではなく、原作がそうだったからである。即ち、『ダーダール・ダードドフトの書』は、第3部で UI-2 を転用してしようと試みたものの、そのズルヴァーン主義的要素に当惑し、中途半端に改作した文献と位置付けられる。

#### 補論 1-4. 第2の意義：「1780年モッラー・カーウス将来コーデックス」

補論 1-4-1. モッラー・カーウス将来コーデックスの行方：次に、第2の意義に即して、『ダーダール・ダードドフトの書』の書写状況から立証された「1780年モッラー・カーウス将来コーデックス」の重要性を強調したい。今回明らかになった知見からすれば、彼がイランから将来したコーデックスには十分な正統性がある。それにも拘らず、18世紀後半に、内容によってではなく党派的な意図から偽作と見做され、本人もハイデラバード・デカンに移住した為に、コーデックスもそちらへ運び去られた。

1842年になってから、息子のモッラー・フェーローズがボンベイにモッラー・フェーローズ図書館を設立することを思い立ち、父がイランで蒐集してきた写本と刊本522点を収めた。しかし、1854年にモッラー・フェーローズ・マドラサを設立するに当たり、モッラー・フェーローズ図書館の蔵書を分置してしまい、更にこの両者ともにボンベイ市内で移転を繰り返した。その結果、1923年にモッラー・フェーローズ図書館の写本カタログ（Dhabhar 1923b）が製作された際には、当初のコーデックスのかなりの部分が散逸していた。

このように、「1780年モッラー・カーウス将来コーデックス」は不運な歴史を辿った。移転先のうち、モッラー・フェーローズ図書館については筆者が

何度も調査したので、これ以上のコーデックスは出現しないとの確信がある。しかし、ハイデラバード・デカンで散逸したと想定されるコーデックスと、モッラー・フェーローズ・マドラサに分置されてボンベイ市内で散逸したコーデックスについては、未だに調査されていない。ゾロアスター教ペルシア語写本を論じる上では、それらの行方が今後の重要な課題となるだろう。

**補論 1-4-2. ゾロアスター教ペルシア語写本コーデックスの 3 系統：**最後に、2011 年段階で判明したゾロアスター教ペルシア語写本の 3 系統を纏めておこう。2010 年以前には、

① イランからインドへ送られ、1677～91 年にナヴサーリーで編集されたコーデックス

が、ゾロアスター教ペルシア語写本の全てと考えられていた。これに対して筆者は、

② イランのイスラーム系写本図書館に所蔵されているイラン側原本のコーデックス

の存在を指摘した（青木 2010 年）。そして、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 コーデックスの出現により、

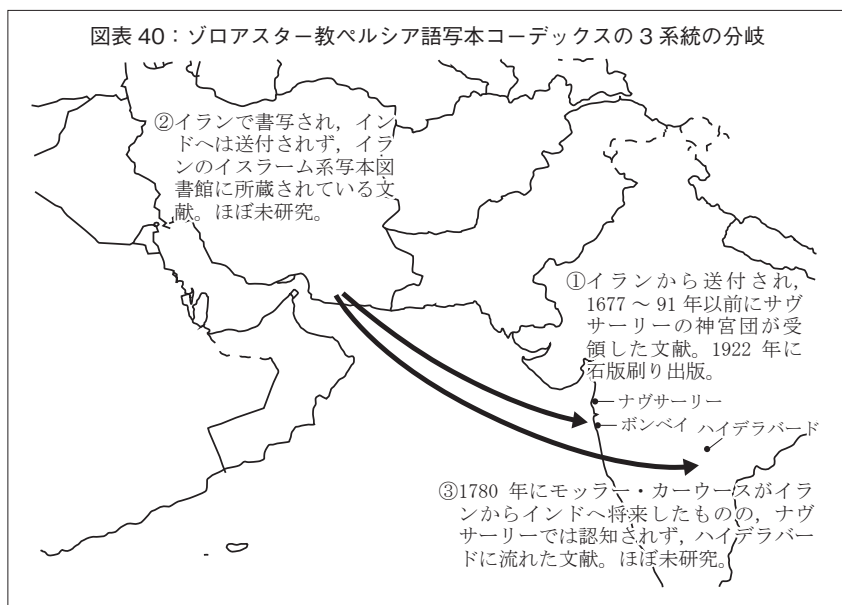
③ 1780 年にインドに将来されたものの、ハイデラバードに流れたカディーミー派コーデックス

の正統性が立証された。従って、現段階では、ゾロアスター教ペルシア語写本の伝承経路は、図表 40 に示した 3 系統まで広がったことになる。

**補論 2. サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の再評価**

**補論 2-1. カディーミー派が将来したケルマーンでの書写版**

**補論 2-1-1. 再評価の必要性と再調査：**補論 1 を受けて、本論の第 4 章第 4 節で触れたサーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の再検討が必



要になったと考えられる。即ち、筆者は2010年段階で、「このコーデックスは、19世紀に既存の教示書集から抜粋して、ハイデラバード付近で二次的に編集されたのではないか」との推測を述べた（青木 2010年, p. 129(152)）。しかし、補論1で「1780年モッター・カーウース将来コーデックス」の重要性が明確になり、同時に、それがハイデラバード・デカンへ移動したことも明らかになった。ここに、「カディーミー派が蒐集し、ハイデラバード・デカンに持ち去ったコーデックス」という視点から、ハイデラバード・デカンの拝火神殿、及びサーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex を検討する必要性が生じた。その調査報告が、この補論2である。

再検討の為に、2011年7月28日～9月5日に互って、第2回のハイデラバード・デカン調査を行った。今回は事情により、筆者が直接現地に赴くことが出来ず、森下信子氏にお願いして、ハイデラバード・デカンの拝火神殿およびイ

スラーム系写本図書館の調査と、サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の前回将来し切れなかった部分のデジタル・データを将来して頂いた。また、このプロジェクトは、サントリー文化財団の研究助成を得ることによって可能になった。デカン高原で困難な調査を担当して下さった森下氏と、理解ある助成を賜ったサントリー文化財団には、この場を借りて篤くお礼を申し上げます。

**補論 2-1-2. コロフォンに見る 1677~91 年編集版との関係：**今回新たに蒐集されたデータによると、このコーデックスには、第 26 リサーラ『教示書』の末尾に当たる p. 1094, ll. 18-19 に、元写本のコロフォンをそのまま引用して、以下のように記されている。

بتاریخ روز دیلیدین فیروز کر ماه فرخ دی قدیمیه ۱۰۳۹ فارسی تحریر شد شهر ربیع الاول ۱۰۸۱ هجری در شهر کرمان نوشته شد.

(本書は) ゾロアスター教カディーミー暦の 1039 年デイ月デイ日に、ペルシア語で書かれた。即ち、ヒジュラ暦の 1081 年ラビーウ・ル・アッワル月に、ケルマーンで書写された。

第 26 リサーラ以前にはコロフォンの記載がない点から見て、第 26 リサーラ或いはそれを数リサーラ遡る範囲内は、ヒジュラ暦 1081 年 = 西暦 1670/71 年にケルマーンで書写されたものと考えられる。また、1670/71 年以降にイラン・インドで書簡を遣り取りしたという事実は知られていないので、1670/71 年にケルマーンで書写されたコーデックスの内容が、1677~91 年のナヴサーリー編集版に反映された可能性はない。

ということは、1677~91 年にインドの神官団がイランからの来信をナヴサーリー編集していたのとは独立して、1670/71 年にイランの神官団もインド宛て書簡の原本をケルマーンで書写していたことになる。このような意味では、サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex は、「ハイデラバード周辺で

の二次的な編集」どころか、17世紀後半におけるイラン側原本を別系統で書写した貴重なコーデックスであると考えられる。

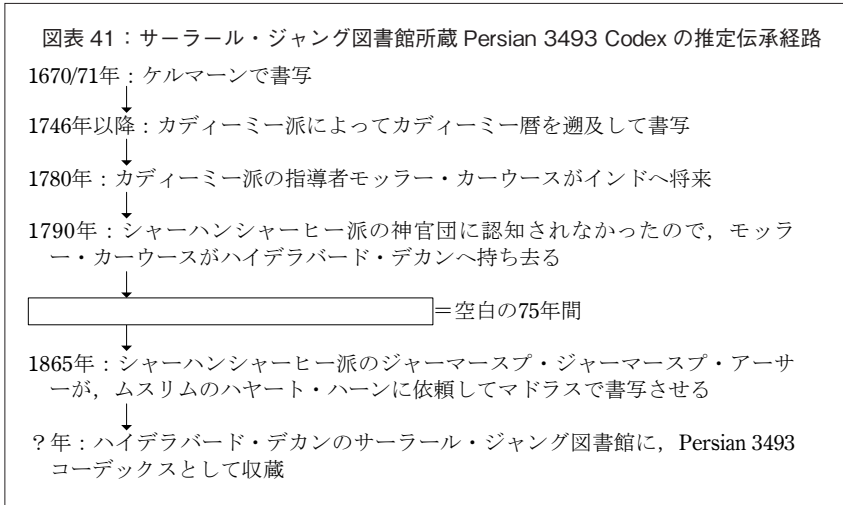
**補論 2-1-2. コロフォンに見るカディーミー派との関係：**また、このコロフォンから、本コーデックスがカディーミー派の書写伝統に属することも明らかである。即ち、このカディーミー暦を西暦に換算すると1670/71年に当たる。だが、カディーミー派の暦法と呼称は、1746年に成立している。ということは、それ以降の書写生が、1670/71年に作成された元写本のコロフォンを書き写すに当たり、当時は存在していなかったカディーミー派の暦法を遡及して書き込んだことになる。つまり、サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex は、1670/71年にケルマーンで書写され、それが1746年以降にカディーミー派の書写生によって再書写されたコーデックスと位置付けられる。

**補論 2-2. シャーハンシャーヒー派が書写したカディーミー派将来本**

**補論 2-2-1. 書写生の依頼主と蔵書印に見るシャーハンシャーヒー派との関係：**次に、1865年に最終的に書写された際の書写生の依頼主と、その後の所有者を知る手掛かりが2つ確認される。1つは p. 1, p. 19, p. 30, p. 38, p. 46 に押されている蔵書印に、「Jamaspji Minochehrji Dastur」とある点である。もう1つは、p. 1160, ll. 16-17 に全体のコロフォンとして、

مالک این کتاب دستورجی جاماسب اساجی ولد منوچهرجی است. اگر کسی دے  
وا کند باطل ست. کاتب حیات خان ولد امام خان. متوطن مدرس ۱۲۸۲ هجریه.

このコーデックスの所有者は Dastūrjī Jāmāsp Āsājī walad-e Manūchehrjī であり、誰かが（所有権を巡って）訴訟を起こしても、（その訴訟は）無効である。書写生は Hayāt Khān walad-e Imām Khān である。（書写の）場所はマドラスで、ヒジュラ暦 1282 年（= 1864/65 年）に書写された。と書かれている点である。



即ち、書写生の依頼主であり、このコーデックスの所有者であった人物の名は「マヌーチェヘルの子、ジャーマースプ」、その家名は「ジャーマースプ・アーサー家」、称号は「ダストゥール」となる。1899年までのゾロアスター教神官団の家系図については、Meherjirana 1899 に詳細に纏められている。(但し、家族関係などに関して微妙な情報を含むので、private circulation only である。)それによると、名前と生没年の両面でこれに該当する人物は、Jamaspji Minocheherji Jamasp-Asana (1830-1898) しかいない。彼はシャーハンシャーヒー派の初代指導者ジャーマースプ・アーサーの直系4代の曾孫に当たり、19世紀後半のシャーハンシャーヒー派を代表する学者神官である。インドでの伝統を尊重する同派の指導者として、インドにあるゾロアスター教写本の蒐集に当たり、マルティン・ハウク（補論 1-2-2 参照）と共に、草創期のゾロアスター教文献研究の発展に尽くしたとされる。

補論 2-2-2. シャーハンシャーヒー派が「1780年モッラー・カーウース将

来コーデックス」を再蒐集：このような人物が、マドラスのムスリムに依頼してサーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex を書きさせたということは、それをインドで書かれたゾロアスター教ペルシア語写本と受け取り、シャーハンシャーヒー派に資する文献だと考えたのであろう。本人がこのコーデックスを実見していたら、暦法がカディーミー派のものであることは容易に見抜けたはずなので、確認せずにマドラスに発注したのだと思われる。依頼を受けたハヤート・ハーンはムスリムだから、ゾロアスター教徒内部の宗派対立など知る由もなく、「カディーミー暦」まで忠実に再現して書写した。

では、1670/71年にケルマーンで成立したカディーミー派の写本が、1865年のマドラスに出現したのは何故だろうか？ この問題をコロフォンから実証するのは不可能だが、史実に鑑みれば、1790年にモッラー・カーウースが、イランから将来したコーデックスと共にハイデラバード・デカンへ移動している。ということは、最も無理のない推定としては、サーラル・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex は、本来は「1780年モッラー・カーウース将来コーデックス」の一部としてハイデラバード・デカンへ移動し、それが1865年にマドラス周辺で見付かったのであろう。ジャーマースプ・ジャーマースプ・アーサーは、曾祖父が受け取りを拒否した為にハイデラバード・デカンへ流出したカディーミー派のコーデックスを、その85年後にインド伝統のコーデックスと誤解し現地のムスリムに依頼して書きさせたのである。

なお、細かいことだが、サーラル・ジャング図書館内の写本分類表には、本コーデックスについて「著者：Dastūr Nūshiravān Marzbān Kermānī, 成立年代：シャー・アッバース・サファヴィーの時代」と記されている。これが本当だとしたら、イラン側で最古のコーデックスが編集されていたことになるので、筆者も最初は驚いた。

しかし、写本に当たって調べてみると、第5リサーラ『アルダー・ウィーラーフ・ナーメ』の末尾 p. 145 に、Dastūr Nūshiravān Marzbān Kermānī の名が挙



げられているのを、カタログ作成者がコーデックス全体の編者と誤解した結果のようである。この人物は、17世紀前半にケルマーンで活動した神官で、既存のゾロアスター教ペルシア語文献を韻文に書き直したことで有名である。現存する限りでも、以下の5点の文献が彼によって韻文に書き換えられている。

『マズダクとコバード王の物語』（1615年）（Dhabhar 1932, p. 582）

『アムシャスパンダーン讃歌』（Dhabhar 1932, p. 579）

『スルターン・マフムード・ガズナヴィー物語』（Dhabhar 1932, p. 579）

『ヤズドのゾロアスター教徒に対する不当な非難』（1621年）（Dhabhar 1932, p. 579）

『アルダー・ウィーラーフ・ナーメ』（Dhabhar 1932, p. 590）

この最後の韻文文献が、サーラール・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 コーデックスの第5リサーラに収録され、その際にコロフォンで「韻文に直した著者」を単に「著者 (tasnif)」と略記したのが、誤解の原因のようである。

### 補論 2-3. サーラール・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex の意義

以上のように、イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex から推定された「1780年モッラー・カーウース将来コーデックス」の重要性は、直ちにサーラール・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex によって裏付けられた。今後のゾロアスター教研究にとっては、イラン本国のイスラーム系写本図書館に所蔵されたゾロアスター教ペルシア語写本の調査と並んで、更なるハイデラバード・デカンのイスラーム系写本図書館および拝火神殿に所蔵されたゾロアスター教ペルシア語写本の調査が重要になると考えられる。

## 参考文献表

### 写本

イラン・イスラーム共和国議会図書館所蔵 Majles 13522 Codex

サーラール・ジャング図書館所蔵 Persian 3493 Codex

### 写本カタログ

Dhabhar, E. B. N. 1923a: *Descriptive Catalogue of all Manuscripts in the First Dastur Meherji Rana Library, Navsari*, Bombay.

—1923b: *Descriptive Catalogue of Some Manuscripts bearing on Zoroastrianism and pertaining to the Different Collections in the Mulla Feroze Library*, Bombay.

Hā'erī, 'Abd al-Hoseyn et als. (eds) 1305-1377AH: *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khattī-ye Ketābkhāne-ye Majles Showrā-ye Eslāmī*, vol. 37, Tehrān.

### 刊本・研究書

Bailey, H. W. 1943: *Zoroastrian Problems in the Ninth-Century Books*, Oxford.

Dhabhar, E. B. N. 1932: *The Persian Rivayats of Hormazyar Framarz*, Bombay (reprint, 1999).

Haug, Martin 1884: *Essays on the Sacred Language, Writings, and Religion of the Parsis*, Bombay.

Meherjirana, Ervad Rustomji Jamaspji Dustoor 1899: *The Genealogy of the Naosari Parsi Priests: issued for Private Circulation Only by the Library of Austa Naoroz Ervad M. Parveez*, London.

West, E. W. 1896-1904: "Pahlavi Literature," *Grundriss der iranischen Philologie*, zweiter Band, pp. 75-129.

Zaehner, R. C. 1955: *Zurvan: a Zoroastrian Dilemma*, Oxford.

青木健 2003年:「インド・ゾロアスター教徒の思想形成」, 小林フェローシップ 2002年度研究助成論文, 富士ゼロックス小林節太郎記念基金。(『ゾロアスター教の興亡—サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ—』, 刀水書房, 2007年, pp. 293-314に再録)

—2010年:「ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究1~『ウラマー・イエ・イスラーム』の写本蒐集と校訂翻訳~」, 『東洋文化研究所紀要』, 第158冊, pp. 166(115)-78 (203)。

—2011年 a:「初期イスラーム神学ムタズィラ派研究2~『ウラマー・イエ・イス

- ラーム』の写本蒐集と校訂翻訳～, 『東洋文化研究所紀要』, 第 159 冊, pp. 112(249)-66(295)。
- 2011 年 b: 「ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究 3～『ウラマー・イエ・イスラーム』の写本蒐集と校訂翻訳～, 『東洋文化研究所紀要』, 第 160 冊, pp. 224(413)-127(510)。
- 後藤裕加子 2008 年: 「サファヴィー朝年代記とトルコ暦(十二支)の導入」, 『東洋史研究』, 66-4, pp. 663-631。

### 謝辞

本稿作成に当たっては、ハイデラバード・デカンでの写本蒐集を代行して下さった森下信子氏(ロシア科学アカデミー東洋写本研究客員研究員)、ハイデラバード・デカン在住のゾロアスター教徒ジェハーンギール・ビスネイ氏(Jehangir Bisney)、及びサーラル・ジャング図書館写本部門司書長のサイヤド・アスフィア・カウセル博士(Saiyad Asfia Kauser)のお世話になった。記して感謝したい。

また、本稿脱稿後、高橋秀海氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)から、下記の論文をご教示頂いた。「ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究 3」の内容に組み入れるには間に合わなかったが、今後、シリア語文献に現れたズルヴァーン主義情報を論じる上での貴重な先行研究である。高橋氏には篤くお礼を申し上げたい。

ЮЛИЯ ФУРМАН, ПЕРСЫ И ИХ РЕЛИГИЯ В «ИСТОРИИ» ЙОХАННАНА БАР ПЕНКАЙЁ, СИМВОЛ, No. 61, 2012, pp. 122-146